

紹介

近藤政美著

『天草版『平家物語』の原拠本、および語彙・語法の研究』

濱千代 いづみ

1 はじめに

近藤政美先生は昭和48年に金田一春彦氏・清水功氏との共編で『平家物語総索引』〈学研〉を世に送った。この書は『平家物語』の語学的研究に大きく貢献し、これを利用して多くの研究者が論文を発表した。もちろん、編者である先生もこれを利用して語彙・語法の研究を続け、数々の注目される論文を発表した。また、先生は中世日本語を解明する上で、室町時代末期から江戸時代初期にかけて成立したキリシタン資料が重要だと考え、『コンテムツス・ムンヂ』（「キリストにならいて」という意味の教義書）の国字本とローマ字本の索引、さらに『天草版平家物語総索引』〈勉誠社〉を刊行した。

天草版『平家物語』は、室町時代末期に来日したイエズス会の外国人宣教師たちが、日本の言葉と歴史を学ぶためのテキストとして編纂された。和漢混交文の『平家物語』をその当時の話し言葉に訳したもので、右馬の允うまじょうの問いに応じて喜一きいち検校けんぎょうが語るという問答体になっている。中世日本語の語彙・語法等を解明するのに最も重要な資料の一つである。

平成になると、パソコンによる語彙・用例付きの総索引の作成が可能になった。先生の確実な知見に基づいた丹念な作業の経験が、『平家物語高野本語彙用例総索引』（自立語篇）・同上（付属語篇）、『天草版平家物語語彙用例総索引』の刊行に結実した。先生はこれらの索引を利用して語彙の計量的な研究を行った。また、この間も天草版『平家物語』と100種余りの『平家物語』の諸伝本の本文を比較し、原拠本に関する探究を続けていた。本書は天草版『平家物語』の原拠本および語彙・語法に関する先生の既発表の研究論文を中心にしてまとめられたものである。

2 本書の構成

本書に収録されている論文の旧稿は、昭和61年から平成14年に至る長い期間に執筆された。先生が確実な研究を積み上げてきた証しである。本書の構成を目次に従って示すと以下のとおりである。

まえがき

第一部 天草版『平家物語』の原拠本の研究

第一章 はじめに

第二章 原拠本研究史の概観

第三章 天草版『平家物語』の原拠本（〔イ〕の範囲）

〔Ⅰ〕 卷Ⅰの原拠本一百二十句本系諸本との語句の照応を視点にして一

〔Ⅱ〕 卷Ⅱ第1章（妓王）の原拠本

— 一百二十句本系諸本との語句の照応の視点にして一

〔Ⅲ〕 卷Ⅰの原拠本と『平家物語』〈早大本〉との関連

第四章 天草版『平家物語』の原拠本（〔ロ〕の範囲）

— 卷Ⅱ第2章～卷Ⅲ第8章、および卷Ⅳ第2章～卷Ⅳ第28章—

第五章 天草版『平家物語』の原拠本（〔ハ〕の範囲）

— 卷Ⅲ第9章～卷Ⅳ第1章—

第六章 むすび

第二部 天草版『平家物語』の語彙・語法の考察

第一章 はじめに

第二章 天草版『平家物語』の基幹語彙（自立語）の計量的考察

〔第二章付録〕 資料Ⅰ 天草版『平家物語』の基幹語彙（自立語）

資料Ⅱ 『平家物語』〈高野本〉の基幹語彙（自立語）

第三章 天草版『平家物語』の語彙（付属語）の計量的考察

〔Ⅰ〕 助動詞の基幹語彙

〔Ⅱ〕 助詞の基幹語彙

第四章 天草版『平家物語』の文末語の計量的考察

〔Ⅰ〕 ピリオド終止の語およびその文の種類との相関性

〔Ⅱ〕 ピリオド終止の場合の品詞・活用形などと文の種類との相関性

第五章 天草版『平家物語』の語法の考察—原拠本との比較を中心にして—

第六章 むすび

あとがき

〔付録〕 天草版『平家物語』の日本語の音節のローマ字綴り

第一部では、ポルトガル語式のローマ字で綴られた本文を漢字平がな交じりに翻字し、100種余りの『平家物語』諸本の古写本・古版本の原本・写真・影印による調査と対照

してある。そして、範囲によって原拠にした『平家物語』の種類が異なることを明らかにし、現存の諸本を基準にしてそれぞれの位置付けを試みている。その結果を表にして示すと、次のようになる。

『平家物語』(十二巻本)による範囲の表示	天草版『平家物語』の原拠本に近い諸本の例	天草版『平家物語』の原拠本との距離
(イ) 巻一～三	〈竜大本〉〈高野本〉〈西教寺本〉	かなり近い
(ロ) 巻四～七	〈斯道本〉一次・二次(断片)	極めて近い
巻九～十二	〈小城本〉〈鍋島本〉	かなり近い
(ハ) 巻八	〈平松本〉〈竹柏園本〉	近い

第二部では、『平家物語高野本語彙用例総索引』(自立語篇)・同上(付属語篇)・『天草版平家物語語彙用例総索引』を利用し、『古典対照語い表』(宮島達夫編)をも参考にして、天草版『平家物語』の語彙の比較計量的分析を試みている。たとえば室町時代・話し言葉・作品の内容という視点から、天草版『平家物語』の語彙の特色を把握したことである。また語法については、原拠本の本文に近い諸本との比較によって分析し、説明している。

3 各章の概要

3.1 第一部

(1) 第二章 原拠本研究史の概観

この章では、天草版『平家物語』(〈天草版〉と略す)の口語訳の原拠にされた『平家物語』の研究の道程を四期に分けて整理し、先生の見解を述べている。

第一期 模索期。〈天草版〉が『平家物語』のどの系統に属するかという視点からの見解が多い。その中で土井忠生氏が百二十句本と流布本系統とに基づくという見解を出した。

第二期 二系統論の展開期。『平家物語』の諸本研究を土台にして、前期より多くの諸本が本文の対比に用いられた。流布本系統に近いとされていた巻Ⅰ・巻Ⅱ第1章は覚一本系を基軸にしていることが明らかになった。また、巻Ⅱ第2章以降は、平がな百二十句本より古い漢字交じりの百二十句本であると推測された。

第三期 二系統一補足の説の成立期。清瀬良一氏は巻Ⅰ・巻Ⅱ第1章の原拠を一方流諸本の総合的な書き入れ校合本の形態の本文であると考えた。この範囲について、原拠になった本を一本と考えるものと、二本と考えるものがある。巻Ⅱ第2章

以降は〈斯道本〉の出現で前期の推測が確認されたが、その二次本文と同一のものであるという推測が出された。また、巻八に相当する部分は原拠本が前後の部分と異なることが明確になった。

第四期 検証期。前期の清瀬氏の見解に対し、近藤先生は疑問を提出し、新しい見解を示した。また、先生は遠藤潤一氏の論考の問題を指摘し、遠藤氏は再検討の結果、これを訂正した。

(2) 第三章 天草版『平家物語』の原拠本〔イ〕の範囲

この章では、主として清瀬氏の説に対して疑問を提出し、新しい見解を示している。

清瀬氏は巻Ⅰの原拠を一方流諸本の総合的な書き入れ校合本の形態の本文であると考えた。それに対し、先生の見解は次のようである。

〈天草版〉の語句の中で現存の一方流諸本の該当する箇所によく照応するものを見つけることができない場合、それらは百二十句本系諸本の中に見られる。このことから、百二十句本系の『平家物語』が原拠本の本文の形成に関与していると推測する。

〈天草版〉の問題の語句とよく照応するのは〈斯道本〉が多く〈小城本〉がこれに次ぐ。このことから、それは、巻Ⅱ第2章以降の原拠にした漢字片かな交りの百二十句本の巻Ⅰに相当する部分であると推測する。

また、巻Ⅱ第1章の原拠について、清瀬氏は覚一本系の〈西教寺本〉を基軸にして平かな百二十句本の本文が関与したと考えた。それに対し、先生の見解は次のようである。

百二十句本の中でも漢字片かな交りの〈斯道本〉にきわめて近く、〈小城本〉にも近い本文が関与している。それは巻Ⅱ第2章以降の原拠にしたものと同一の『平家物語』であると推測する。

(3) 第四章 天草版『平家物語』の原拠本〔ロ〕の範囲

この章では、〔ロ〕の範囲の原拠本について、〈斯道本〉とどのような関係に立つものであるかを検証するために、3項を選んで論じている。原拠本が〈斯道本〉(第一次・第二次の両本文)そのものでないことを示し、〈斯道本〉の第二次本文の類に、覚一本系の〈竜大本〉の類、および八坂流甲類の〈竹柏園本〉の類の語句や表現が校合などの方法で取り入れられて成立したものと推測している。

(4) 第五章 天草版『平家物語』の原拠本〔ハ〕の範囲

〈斯道本〉は巻八を欠く。この章では、〔ハ〕の範囲の原拠本について、〈斯道本〉と

同じ百二十句本系の〈小城本〉〈鍋島本〉、八坂流甲類の〈平松本〉〈竹柏園本〉、一方流の〈竜大本〉〈米沢本〉の本文との関係を詳しく調査している。よく照応する箇所が多いのは〈平松本〉〈竹柏園本〉であるが、その一方を基幹として原拠本の本文が形成されたとは考えられず、原拠本と両本が互いに近い位置に鼎立していると論じている。

3. 2 第二部

(1) 第二章 天草版『平家物語』の基幹語彙（自立語）の計量的考察

この章では〈天草版〉の自立語について、大野晋氏の「平安和文脈系文学の基本語彙」のモデルを利用し、第一・第二基幹語彙を設定して〈高野本〉と比較し、その特色を述べている。その際『源氏物語』も参考にしている。以下、特色を箇条書きにする。

〈天草版〉の基幹語彙は大野モデルに合うが、〈高野本〉のは合うといえない。

3 作品とも第一基幹語彙は大部分が和語である。平安時代から室町時代に至るまで日常の京都語として用いられていたもので、当時の基礎語である。

〈天草版〉〈高野本〉で第一基幹語彙であるが〈源氏〉で使用が少ないのは、戦闘に関係のある語、武士・武家、地名である。

〈天草版〉で第一・第二基幹語彙であるが〈高野本〉〈源氏〉で使用が少ないのは、敬語・人物呼称や、副詞・接続詞など近代語へと続く語彙である。

(2) 第三章 天草版『平家物語』の語彙（付属語）の計量的考察

この章では〈天草版〉の付属語について、独自に第一・第二基幹語彙を設定して〈高野本〉と比較し、その特色を述べている。以下、助動詞・助詞に分けて特色をまとめる。

〈天草版〉の助動詞の基幹語彙は16語で、助動詞の大部分の意味領域はこれらによって表現できる。両本で基幹語彙に入るのは「る・らる・す・さす」など9語で、対応する文を比較した場合、同じ語の使用されていることが多い。〈天草版〉で基幹語彙であるが〈高野本〉で中位・低位・不使用の語は「う・た・ちや・なんだ」など7語存する。これら是对応する文を比較した場合、他の語の使用されていることが多く、対応する文の存しないこともある。〈天草版〉の基幹語彙は京都の話し言葉の基礎語である。〈天草版〉で中位・低位の語の中には「けり・き・ん・べし」などのように文語体で用い、〈高野本〉で基幹語彙に入る語も存する。口語訳の原拠にした『平家物語』の影響がある。

〈天草版〉の助詞を使用比率の高低という視点から〈高野本〉と比較した場合、〈天草版〉を作品として特徴づける語は第一基幹語彙の中に見出せない。しかし、第二基幹

語彙の中に「から・で・ぞ・こそ」など6語を指摘できる。これらは意味領域・語形・機能の変化に関係する語と、係助詞の衰退に関係する語とに大別できる。「から」を例にとると、この語は〈高野本〉で全く見られない。起点・経由点の意味の「より」と対応する例が多い。室町時代の話し言葉では起点・経由点の意味の「から」が多用されたことを反映している。また、「ぞ」を例にとると、係助詞としての機能が衰退し、終助詞としての使用は増加しているが、使用比率にあまり影響していない。〈天草版〉の使用比率は〈高野本〉の半分にも達していない。

(3) 第四章 天草版『平家物語』の文末語の計量的考察

この章では〈天草版〉の文末語について、前半でピリオド終止の語とその文の種類との相関性を視点にして考察している。文末の符号・引用助詞などを集計した合計は5365例、うちピリオド終止は1436例で、その文末語の異なり語数は106である。「た・ござる・まうす・ちゃ・なんだ・ある・うず」が多い。地の文ではタが圧倒的に多く、平家の盛衰を過去のこととして語ることと深く関わっている。また、「ござる・まうす」という敬意を添える語が多いのは問答体形式と深く関わっている。会話文では「た・ござる・ちゃ」、和歌・引用では「かな」が多いことが計量的に判明した。

次に後半で、ピリオド終止の場合の品詞・活用形などと文の種類との相関性を考察している。〈天草版〉は『平家物語』を室町時代の口語に訳したものであるが、活用語の97.74%を超える文末語を口語として説明できる。前半で示した7語のうち、始めの5語は終止形で地の文、「ある」は命令形で対話文、「うず」は終止形で会話文中の用例が大部分である。

文末語の特徴は口語訳、問答体、過去の叙述、日本語のテキストといった〈天草版〉の文章の構造や成立の事情と深く関わっている。

(4) 第五章 天草版『平家物語』の語法の考察—原拠本との比較を中心にして—

この章では〈天草版〉の語法について、近代語としての特徴が現れているものを中心に説明している。取り上げている項目を以下に示す。

動詞 (a.終止形と連体形との合一化、および命令形の語尾、b.音便の種類と各々の特徴、c.活用形式の特徴、d.敬語の特徴)、形容動詞、形容詞、助動詞 (a.「る・らる」と「す・さす」、b.「ず」と「なんだ」、c.「べし」と「まじ」の承接、d.「う」と「うず」と「らう」、e.「た」と「たり」、f.「なり」と「ぢや」、g.「さうなり(ぢや)」と「げな」、助詞 (a.格助詞、b.接続助詞、c.副助詞・並列助詞、d.終助

詞、e.間投助詞)

4 おわりに

筆者は近藤政美先生に師事し、『天草版平家物語総索引』の作成時には原稿の清書をお手伝いして言葉の単位句切りを学んだ。『中世国語論考』を拝読し、実証的に研究を進めてきた先生の手法を範としてきた。平成になって間もなくのころ、MS-DOSというOSで動くパソコンを使いこなすため、先生に従い、東京や関西で開かれる研究会に参加した。そこで得た知識や手法を応用し、何万件というデータを入力し、その内容を確認するという多大な作業を行うようになった。土曜日や日曜日、あるいは夏季休業日や冬季休業日に先生の研究室を訪ねた。入力したデータの集計をパソコンに任せている間が休憩の時間で、20分から30分くらいはあった。その後、OSは進化し、ハードディスクの容量は大きくなり、付設の機器もソフトウェアも格段に進歩し、その値段も手ごろになった。しかし、先生とお茶を飲みながらパソコンの回転する音を聞き、集計の間は凍りついたままだったディスプレイの画面が急に変わり、期待していた結果が映し出された時の感動は今も覚えている。何ものにもかえられない記憶である。

長期にわたって執筆された原稿が、体系立てられて一書に構成され、本書の刊行に至った。日本語・日本文学をはじめとする学界への寄与はまことに大きい。先生の今後のご健康とご活躍を祈念して、紹介を終わることにする。

参考文献

- 『平家物語総索引』学習研究社、1973年、共編
- 『天草版平家物語総索引』勉誠社、1982年、共編
- 『中世国語論考』和泉書院、1989年
- 『平家物語高野本語彙用例総索引』（自立語篇）勉誠社、1996年、共編
- 『平家物語高野本語彙用例総索引』（付属語篇）勉誠出版、1998年、共編
- 『天草版平家物語語彙用例総索引』勉誠出版、1999年、共編

(2008年3月25日発行 和泉書院刊 A5判 434ページ 13,000円+税
ISBN978-4-7576-0461-2)